

早期発見すればガンは怖くない

吉永 馨

「ガンは怖くない」という題はやや逆説的ですね。一般にガンは怖いものとされています。人はガンで死ぬことが一番多いのです。死因の3分の1はガン死だ、と私たちも言っています。毎年30万人以上がガンで死んでいるのは事実です。

しかしそれなら、ガンが怖いというより、死が怖いというべきでしょう。私が医師になりたてのころは結核が死因の第一を占めていました。更にその前は肺炎だの、胃腸の感染症だのが第一位を占めていました。

死は多くの人には怖がります。人は本能的に死を恐れ、死を嫌います。しかし人は何時かは死ななければなりません。

終戦（昭和20年）以前は、日本人の平均寿命は50歳に達しませんでした。私の子供のころは、周りの誰かが死んで、お葬式が始終ありました。お葬式があると、葬式饅頭が配られ、子供たちは喜んで食べたものです。当時は、人の死や葬式が普通のこと、ありふれた日常でした。人々は死に慣れていました。死が身近にあり、そんなに怖がられていなかったのです。

死の怖れを超越せよというのは宗教の立場ですからここでは立ち入らず、宗教家にお任せしましょう。

ガンの場合、死ぬから怖いという以外に、激痛にさいなまれ、七転八倒して苦しむと思われているようです。死ぬのは仕方がないとしても、そんな苦しみは真っ平だ、そんな目にあいたくない、という怖れがあるのではないのでしょうか。しかしこれは誤解です。少しも苦しまずに最期を迎える患者さんは多いのです。私の母も84歳でガンで亡くなりましたが、痛みはありませんでした。

しかし統計的に見ますと、痛みがないのが3分の1、少し痛いのがアスピリンのような痛み止めですむものが3分の1、激痛があり、麻薬を必要とするのがやはり3分の1となっています。

激痛がある場合もモルヒネなどの強力な鎮痛薬をうまく使いますと治療できます。うまく使うのは医師の腕で、麻薬を使いこなす医師は、鎮痛の専門家、でいろいろなケースに対応して薬を使いこなします。緩和医療を専門とする施設にはそういう医師がいます。普通の病院でも、麻酔科の医師は痛み止めに精通しています。痛み外来（ペインクリニック）を標榜している医師もいます。

ガンは早期発見すれば100%近く治ります。少し進行したガンでも最近はかなり治るようになりました。それだけ治療が進歩したのです。ガン全体の50%は治癒しています。早期発見すればガンは怖いものではありません。

ガンは早期発見が大切だ、ということは誰でも知っています。しかし、ガンの検診を受ける人は意外に少ないのです。国は、ガン死を減らそうとして、がん検診を推奨し、各自治体もそれを進めています。それでも受診率は低いのです。人々は、意外にもガンを怖れていないのです。ガンになればなったで仕方ないと思っているようです。ガン恐怖心というのは案外少ないのではないで

しょうか。

近年ガンが増えています。それは高齢化のせいです。50歳や60歳という年齢別にガンの発生を見ますと、決して増えていないのです。高齢者が増えたからガンも増えたのです。高齢者はガンでなくても死亡率が高いのでガン死はそれほど特別な死ではありません。高齢者のガンは進行が遅く、痛みも軽いのです。それほど怖れるべきものではありません。

以上いろいろなケースを見て来ましたが、総じて、ガンは余り怖くないと言っても言い過ぎではないでしょう。